

論 文

李頎の士人描写詩について (一)

A Study of Li Qi's Poems Representing High Tang Literati Part I

川 口 喜 治
Yoshiharu KAWAGUCHI

本論は、盛唐の詩人・李頎の士人描写にかかる作品に関する考察である。ここで「士人」というのは、李頎自身はもとより、李頎が交遊を持ち、直接その詩を贈った同時代の伝統的知識人のことを言う。歴史上の人物など李頎と面識がない人物は含めていない。

さて人物、士人を描写するという点において、他者描写の詩であれ、自己描写の詩（以下、本論では自述詩と称す）あれ、そこには、作り手のその時における他者に対する感情、あるいは自己についての述懐や自己の思想の表白が混在することがほとんどであり、歴史書のような純然たる事跡の描写を志向する作品は楽府など叙事性の強い作品を除けば、むしろ全くといってよいほど見られないだろう。『毛詩』大序の詩学論でつとに分析されていたように、詩歌には、（叙事ではなく）抒情を志向する性格が本源的に存在するゆえ、それは当然のことでもあろう。そこで、本論では、他者や自己の経歴・事跡を比較的客人的に描写した部分が多い作品に焦点を当てて論じてゆかざるを得ない。また人物描写は、他者を描写する場合に、その客観性ゆえに特徴的なものが多いと予想される。いきおい本論では、他者の姿を描写した作品を多く取り扱ってゆくことになるであろう。¹⁾

李頎の伝記については不明な部分が多い。ここでは以下の研究を参考にその概略を述べる。

- ・ 聞一多「唐詩大系」²⁾
- ・ 傅璇琮『唐代詩人叢考』「李頎考」³⁾
- ・ 譚優学『唐詩人行年考』「李頎行年考」⁴⁾
- ・ 劉宝和『李頎詩評注』「李頎籍貫辨疑」⁵⁾

まず、生卒年については、聞氏が六九〇年（天授元年）～七五一年（天宝十載）⁶⁾、傅氏は不詳、譚氏は六九〇年～七五四年（天宝十三載）後、劉氏「事迹考」は？～天宝八載から久しからずして死去、とする。各説の考証については省略するが、七世紀末から八世紀中頃の開元・天宝時代の人と考えてよいであろう。

籍貫については、劉氏「籍貫辨疑」が河南府潁陽県（河南省登封県西）とする。この地は、洛陽の南にある。傅氏・譚氏は不詳とする。少なくとも、李頎の作品から考えて、劉氏の指摘する潁陽県に居住していたことは確かである。

李頎は、進士科に及第しており、その年を傅氏・譚氏は開元二十三年とし、劉氏「事迹考」は十年早めて開元十三年とする。いずれも、及第後に衛州新郷県（河南省新郷市）の尉となったとしている。その他の経歴は不詳である。

また、呉汝昱『唐五代人交往詩索引』⁶⁾によれば、盛唐の著名詩人としては、王維、王昌齡、高適、岑參、崔顥、綦毋潛など交遊があったようである。

総じて、李頎は中下級階層の伝統的知識人であり、科擧の進士科及第によって官僚となったもののその後の経歴は華々しくはなく、むしろ官途においては不遇の人生を送ったのであろう。

詩人としては、王維、王昌齡、高適などと交遊を持ち、李白や杜甫が活躍した中国古典詩のいわば達成期と評価される盛唐という文学環境の中にいたと判断してよいであろう。

さて、袁行霈氏が「唐代詩人の中で、李頎が人物の性格を克明に描写することに成功した第一の詩人である」と評価するように、李頎詩における人物描写は、他の詩人の作品に見られない特徴があると考えられる。また袁氏の指摘以

外にも、李頎詩の人物描写に特徴があることはいくつかの論考ですでに考察されている⁽⁸⁾。

本論でも、これらの先行研究に導かれつつ、李頎詩における士人描写の特質に迫っていききたいと考える。

(一)

まずはじめに、李頎以前における中国古典詩歌の中で人物、士人はどのような描写されていたかについて見ていきたい。

先秦詩においては、殿様、青年、美女の姿を、抽象的な表現で描写するにとどまっている。詩歌の発展から考えても、表現の抽象性は当然のことであろう。

ここでは、描写が比較的具象的な例として、『詩經』齊風「猗嗟」の第一章を掲げる。弓矢の舞をする青年の立派な姿を描写したものである。

猗嗟昌兮 猗嗟 昌んなる

頎而長兮 頎としてたけ長く

抑若揚兮 抑として揚し

美目揚兮 美しき目にまゆは揚がり

巧趨踰兮 巧なる趨みの踰として

射則臧兮 射れば則ち臧ろし

ついで『詩經』衛風「碩人」の第二章を掲げる⁽⁹⁾。貴族の女性の婚礼における美麗な姿を描写したものである。

手如柔荑 手は柔かき荑の如く

膚如凝脂 膚は凝れる脂の如く

領如蝤蛸 領は蝤蛸の如く

齒如瓠犀 齒は瓠犀の如く

螭首蛾眉 螭の首に蛾の眉

巧笑倩兮 巧みなる笑いは倩たり

美目盼兮 美しき目は盼たり

後者の作品に「蝤蛸(木くい虫)」「瓠犀(瓜の種)」、また後世美女の形容の代名詞となる「蛾眉」など、修辭を凝らした比喩が見られるのが注目されるが、前者とともに、描写対象の個別性・具体性が明確になる表現ではなく、換言すれば美男・美女に汎用的に用いることができるものであると言えよう。また単純な比較にはなるが、人物描写の修辭が、男性よりもむしろ美しい女性の形容

を契機に発展していったことが予想される。なお女性の人物描写の変遷については、本論が士人描写を焦点としていることから、以下では取り上げない。

漢魏六朝の詩歌において、本稿としてまず注目されるのは、古樂府「陌上桑」(『漢詩』卷九)⁽¹⁰⁾である。特に主人公・羅敷が言い寄ってきた太守に対して、夫の立派さを述べる後半部分において、そのキャリアや官僚としての姿が描写されていることに注意したい。

十五府小史 十五にして府の小史

二十朝大夫 二十にして朝の大夫

三十侍中郎 三十にして侍中郎

四十專城居 四十にして城を専らにして居る

爲人潔白皙 人と為り 潔白皙

鬢鬢頗有鬚 鬢鬢 頗る鬚有り

盈盈公府步 盈盈として公府を歩み

冉冉府中趨 冉冉として府中を趨る

周知の通り樂府は叙事性、物語性が強い詩歌であり、作品中に人物が登場し、その描写がなされることはその特徴のひとつであったと言えよう。勢い、描写対象の人物が士人である場合は、士人としての重要な要素である官僚としての姿が具体的に描かれることになったと考えられる。「陌上桑」の引用部分の前半四句の描写は、羅敷の夫が典型的な出世街道を歩んでいるという、樂府作品らしい虚構性が目立つのであるが、詩歌において士人のキャリアが漢代の古樂府になって具体的に描き出されるということになることを確認しておきたい。

ほかには、「長安有狹斜行」(同右)に、

太子二千石 太子は二千石

中子孝廉郎 中子は孝廉郎

小子無官職 小子は官職無きも

衣冠仕洛陽 衣冠して洛陽に仕う

とある。主人公の男性の長男、次男、三男の官吏としての姿を描く。三人の兄弟が皆有能であることを「陌上桑」と同様その官位の点から描く叙事的な描写である。末二句で弟が官職を正式に授かってはいないが都・洛陽で仕えているというのは、待制・待詔のような仮雇いを指しているのか確実なことはわからないうが、「無官職」という状況を描写していることは確かであり、ここでは詩歌

がそのような状況を表現していることを押さえておきたい。

次に注意しておきたいのが、「雁門太守行」（同右）である。

孝和帝在時 孝和帝 在りし時

洛陽令王君 洛陽令 王君

本自益州廣漢蜀民 本自益州廣漢蜀の民にして

少行宦學 少くして行きて宦え

學通五經論 学びて五經の論に通ず

明知法令 法令を明知し

歷世衣冠 歷世の衣冠にして

從溫補洛陽令 温從り洛陽令に補せられ

治行致賢 治行は賢を致し

擁護百姓 百姓を擁護し

子養萬民 万民を子養す

に始まり、以下のように続く。

外行猛政、内懷慈仁。文武備具、料民富貧。移惡子姓、篇著里端。／傷殺人、比伍同罪對門。禁釜矛八尺、捕輕薄少年。加笞決罪、詣馬市論。／無妄發賦、念在理冤。敕吏正獄、不得苛煩。財用錢三十、買繩禮竿。／賢哉賢哉、我縣王君。臣吏衣冠、奉事皇帝。功曹主簿、皆得其人。／臨部居職、不敢行恩。清身苦體、夙夜勞動。治有能名、遠近所聞。／天年不遂、早就奄昏。爲君作祠、安陽亭西。欲令後世、莫不稱傳。

訓読した歌辞には「孝和帝在時」「洛陽令王君」「益州廣漢蜀民」「從溫補洛陽令」とあり、また歌謡の最後に「爲君作祠、安陽亭西」と個別・具体的な描写がなされていることが注目されよう。『後漢書』卷七六・循吏列傳・王渙列傳の李賢注が、「古樂府歌」としてこの歌辞の異文を引き、王渙の事跡を歌ったとするのも、その個別性・具体性に依拠している。この樂府は、歌謡による伝記であり、散文による伝記と歌謡による伝記が未分化であったのか、あるいは歌謡が伝記の内容を語るようになったのかは、論者にはいま判断できない。ただ詩歌がこのような個別・具体的な士人描写をなしていたという事実は、後世の詩人たちに対して詩歌のあり方について何らかの影響を与えたと考えられる。

「古詩十九首」其七（『漢詩』卷十二）には、次の通りある。

昔我同門友 昔 我が同門の友
高舉振六翮 高く挙がりて六翮を振るう
不念攜手好 手を携えし好を念わず
棄我如遺跡 我を棄つること遺跡の如し

共に勉学に励んだ友人が栄達したのち、歌い手を相手にしなくなった不幸を述べるのが主題であるが、自己の不遇と対照的に友人の出世の経歴に言及されていることが注目されよう。

次に、魏晋における作品として、曹植「贈丁儀王粲詩」（『魏詩』卷七）を掲げる。

君子在末位 君子は末位に在れば
不能歌德聲 徳声を歌うこと能わず
丁生怨在朝 丁生は怨みて朝に在り
王子歎自營 王子は歎びて自ら営む
歎怨非貞則 歎怨 貞しき則に非ず
中和誠可經 中和 誠に経る可し

曹植が丁儀と王粲とに宛てた作品である。「君子」は丁と王を指す。「徳聲」は曹操の功績を頌える歌謡。「自營」は家居して気ままに暮らすこと。ここで注目すべきは、全十八句の中の四句ではあるが、そこに友人の現状を描いていることである。丁儀と王粲が官界で不遇であることを「在末位」「怨在朝」「歎自營」と、その人物の実際の現状に即して描写している。さらに漢代の用例が樂府作品であり「視点の三人称化・場面の客体化」という性質が強いのに對して、「君子」「丁生」「王子」という曹植の一人称的視点で描かれていることである。また詩歌において自己の不遇や悲哀を語ることは『楚辭』以来の伝統であるが、この作品は、詩を贈った相手のそれについて語る早い例として位置づけてよいであろう。詩歌が同時代の他者の個別・具体的な事跡描写への感心を示しだした早い例と言えよう。

陸機「答賈誼詩十一章」其九（『晉詩』卷五）においては、次のような描写が見られる。

祇承皇命 祇みて皇命を承け

出納無違 出納 違ふこと無し

往踐蕃朝 往きて蕃朝を践み

來歩紫微 來たりて紫微を歩む

升降秘閣 秘閣に降り降り

我服載暉 我が服は載ち暉く

陸機が自らのキャリアを歌う。「出納」は王言の「出」下への通達と「納」上への報告。「往踐蕃朝」は呉王の郎中の令となったこと。「來歩紫微」「升降秘閣」は尚書郎となり皇帝に仕えたこと。詩の序には「余昔爲太子洗馬、魯公賈長淵以散騎常侍東宮積年。余出補吳王郎中令。元康六年入爲尚書郎。(余昔 太子洗馬爲りしとき、魯公賈長淵 散騎常侍を以て東宮に侍ること積年。余 出でて呉王の郎中の令に補せられ、元康六年、入りて尚書郎と爲る。)」とある。同じことを表現するのに散文と詩歌において修辭に違いがあることが興味深い、ここでは、自らのキャリアを詩歌において自伝的に描写していることに注目しておきたい。また、詩歌における自己のキャリアの自伝的描写は、他者の事跡を描写することと密接にかかわって変遷してきたと推測される。

次に、潘尼「獻長安君安仁詩十章」其二(『晉詩』卷八)を掲げる。

翼晉伊何 晋を翼けて 伊れ何ぞ

惟國之楨 惟れ國の楨なり

明理内照 明理 内に照り

流風外馨 流風 外に馨る

出敷五教 出でては五教を敷き

入讚典刑 入りては典刑を讚く

黎人既又 黎人 既に又(また)なり

庶獄既清 庶獄 既に清し

叔父の潘岳を頌える作品である。抽象的な表現ではあるが、潘岳の功績と善政を褒め讃えている。魏晉以後の詩歌における他者の経歴への讃辭の早い例として位置づけることができよう。

陶淵明は、その自述的作品において、自己の経歴を比較的具体的に描写した詩人として位置づけることができるであろう。「歸園田居詩五首」其一(『晉詩』卷十七)の前半は、その代表的な例とすることができるであろう。

少無適俗韻 少くして俗韻に適う無く

性本愛丘山 性は本と丘山を愛す

誤落塵網中 誤りて塵網の中に落ち

一去三十年 一去 三十年

羈鳥戀舊林 羈鳥は旧林を恋い

池魚思故淵 池魚は故淵を思ふ

開荒南野際 荒を開く 南野の際

守拙歸園田 拙を守り 園田に帰る

方宅十餘畝 方宅 十畝

草屋八九間 草屋 八九間

榆柳蔭後簷 榆柳 後簷を蔭い

桃李羅堂前 桃李 堂前に羅なる

先に見た陸機の作品よりも、より自己の経歴に即した具体的な自述になっていることが確認できよう。個人の私生活の情景が描かれていることも新しいことであろう。

また士人の姿ではないが他者の個別・具体的に描写としては、我が子を描いた「責子詩」(同右)を挙げる事ができよう。

白髮被兩鬢 白髮 兩鬢を被い

肌膚不復實 肌膚 復た実ならず

雖有五男兒 五男兒有ると雖も

總不好紙筆 総て紙筆を好まず

阿舒已二八 阿舒は已に二八

懶惰故無匹 懶惰 故より匹無し

阿宣行志學 阿宣は行くゆく志学なるに

而不好文術 文術を好まず

雍端年十三 雍端は年十三

不識六與七 六と七とを識らず

通子垂九齡 通子は九齡に垂んとするに

但覓梨與栗 但だ梨と栗とを覓むるのみ

天運苟如此 天運 苟しくも此くの如くんば

且進杯中物 且つ杯中の物を進めん

諸家によって指摘されているが、陶淵明の眼に映った出来の悪い子供達、愛情をもってユーモラスに描写されており、その姿は、映像性豊かに読み手に訴えかけてくる。このような陶淵明の自己を省察した描写、我が子を観察して描写する行為は、特に唐代以降、陶淵明の作品と処世を慕う詩人が多く出るといふことに鑑みるに、詩歌が個別・具体的に人物を描写していくようになる過程において、後世に一定の影響を与えたと考えてよいであろう。

劉宋以後の南北朝の詩歌の士人描写としては、おおむね樂府における登場人物の経歴などの描写や四言詩による人物讃辞が引き継がれてゆく。その中で、注目できるのは、鮑照「代東武吟」(『宋詩』卷七)である。

主人且勿誼 主人 且し誼しくする勿れ

賤子歌一言 賤子 一言を歌わん

僕本寒郷士 僕 本と 寒郷の士

出身蒙漢恩 出身して漢恩を蒙る

始隨張校尉 始めて張校尉に隨い

占募到河源 占募して河源に到る

後逐李輕車 後には李輕車を逐い

追虜窮塞垣 虜を追いて塞垣を窮む

時代を漢代に設定した樂府作品の冒頭である。主人公の男が「賤子」「僕」という一人称を明確に述べた上で自己の経歴を自伝的に語るといふ枠組みを取っているところが新しい手法と見受けられる。典型的な歴史上の人物や場面を用いて語られるが、その経歴の展開に具体性、時間性が比較的明確であることは注意しておいてよいであろう。

時代は少し離れるが、顔之推「古意詩二首」其一(『北齊詩』卷二)は次の如くである。

十五好詩書 十五にして詩書を好み

二十彈冠仕 二十にして冠を弾いて仕う

楚王賜顏色 楚王 顏色を賜わり

出入章華裏 章華の裏に入出す

作賦凌屈原 賦を作りては屈原を凌ぎ

讀書誇左史 書を読んで左史を誇る

數從明月讌 數しば明月の讌に従い

或侍朝雲祀 或いは朝雲の祀に侍る

登山摘紫芝 山に登りて 紫芝を摘み

泛江採綠芷 江に泛かんで 綠芷を採る

歌舞未終曲 歌舞 未だ曲を終えざるに

風塵暗天起 風塵 暗天に起る

呉師破九龍、秦兵割千里。狐兔穴宗廟、霜露沾朝市。璧入邯鄲宮、劍去襄城水。未獲殉陵墓、獨生良足恥。憫憫思舊都、惻惻懷君子。白髮闡明鏡、

憂傷沒余齒。

この作品が、顔之推の実際の経歴をどれだけ反映しているかは不明である。「古意」と題されており、樂府と同様の物語的枠組みを前提としていることは確かであろうが、その中にも、南北朝の動乱の中で波瀾の生涯を送った彼の回想的な自述の態度を伺うことができるのではなからうか。

以上、総じて、唐以前の詩歌における士人(人物)の描写は、その経歴を中心になされてきたと言つてよいであろう。経歴自体が叙事的な性格を強く持つものであるために、樂府や人物を讃える頌詞という叙事性の強い詩歌の中で行なわれてきたとひとまず考えてよいであろう。頌詞が四言であることは、『詩經』を意識した樂曲的性格が強いものであったと考えられる。してみると、人物描写は徒詩系の詩よりも、樂曲との結びつきが強い歌謡の中で主になされてきたということになる。曹植「贈丁儀王粲詩」の例が突出しているように思われるのも、逆に樂府系作品と徒詩系作品が完全に分化していなかったことを示しているのではなからうか。陶淵明については、やはり「一般の潮流の外にあった独立の詩人」であり、「同時代のひとびとのあとを追うことなく」¹⁶⁾「独自の世界を構築していった詩人と位置づけてよいであろう。」

(二)

本節では、初唐詩歌における士人描写を概観してゆきたい。

いま理由は定かにはできないが、唐の初めの王績によって、他者に対して、多くの文字を費やした比較的詳しい描写がなされるようになる。王績「贈李徵君大壽」(『全唐詩』卷三七)を掲げる。

01 孔淳辭散騎 孔淳 散騎を辭し

02 眭昶謝中郎 眭昶 中郎を謝る

03 幅巾朝帝罷 幅巾 帝に朝え罷たる

- 04 杖策去官忙 杖を杖ちて官を去ること忙し
 05 附車還趙郡 車に附きて趙郡に還り
 06 乘船向武昌 船に乗りて武昌に向かう
 07 九徵書未已 九徵 書未だ已まず
 08 十辟譽彌彰 十辟 譽彌いよ彰らかなり
 09 副君迎綺季 副君 綺季を迎え
 10 天子送嚴光 天子 嚴光を送る
 11 灞陵幽徑近 灞陵 幽徑近く
 12 礪谿隱路長 礪谿 隱路長し
 13 編蓬還作室 蓬を編みて還た室を作し
 14 績草更爲裳 草を績ぎて更に裳を為す
 15 會稽置樵處 會稽 樵を置きて処り
 16 蘭陵賣藥行 蘭陵 藥を売りに行く
 17 看書惟道德 書を看るは惟だ道德
 18 傳教止農桑 教えを伝うるは止だ農桑
 19 別有幽懷侶 別に幽懷の侶有り
 20 由來高讓王 由來 讓王を高ぶ
 21 前年辭厚幣 前年 厚幣を辭し
 22 今歲返寒鄉 今歲 寒郷に帰る
 23 有書橫石架 書有りて石架に横たえ
 24 無氈坐土牀 氈無くして土牀に坐す
 25 蘭英猶足釀 蘭英 猶お釀すに足り
 26 竹實本無糧 竹實 本より糧無し
 27 澗松寒轉直 澗松 寒くして転た直く
 28 山菊秋自香 山菊 秋にして自ら香る
 29 管寧存祭禮 管寧 祭禮を存し
 30 王霸重朝章 王霸 朝章を重んず
 31 去去相隨去 去き去きて 相い隨いて去き
 32 披裘驕盛唐 裘を披りて 盛唐を驕らん
- 李大寿なる字問・道德の高い人物が朝廷から招聘されるも官に就かなかつた、まさに徵君の生態を歌っている。隱者であつた王績が、多くの言を費やし讚え

ているのは、その処世に共感するところがあつたのであろうし、称賛すること
 で自己の処世を肯定しているのでもあろう。

作品は、多くの詩句が、過去の隱士などにまつわる故事をモニタージュする
 手法で作られている。いまわかる範囲で出典を記す。

01句は、『宋書』(卷九三) 隱逸列傳・孔淳之列傳(孔淳之) 元嘉初、復徵
 爲散騎侍郎、乃逃于上虞縣界、家人莫知所之。02句は、『魏書』(卷九〇)
 逸士列傳・睦夸列傳「睦夸、一名昶、趙郡高邑人也。……少與崔浩爲莫逆之
 交、浩爲司徒、奏徵爲其中郎、辭疾不起。州郡逼遣、不得已、入京都。……浩
 慮夸即還。時乘一騾、更無兼騎、浩乃以夸騾內之廐中、冀相維繫。夸遂託卿
 人輪租者、謬爲御車、乃得出關」。03句は、『後漢書』(卷三五) 鄭玄列傳「靈
 帝末、黨禁解、大將軍何進聞而辟之。……進爲設几杖、禮待甚優。玄不受朝
 服、而以幅巾見。一宿逃去」。04句は、『後漢書』(卷七六) 循吏列傳・童恢列
 傳「童恢」少仕州郡爲吏、司徒楊賜聞其執法廉平、乃辟之。及賜被劾當免、
 掾屬悉投刺去、恢獨詣闕爭之。及得理、掾屬悉歸府、恢杖策而逝。由是論者
 歸美。05句は、02句を参照。06句は、『晉書』(卷九四) 隱逸列傳・郭翻列傳
 「郭翻」與翟湯俱爲庾亮所薦、公車博士徵、不就。咸康末、乘小船暫歸武昌
 省墳墓。08句は、『後漢書』(卷八二下) 方術列傳下・董扶列傳「董扶」前後
 宰府十辟、公車三徵、再舉賢良方正、博士、有道、皆稱疾不就。09句の「綺
 (里)季」は、商山四峻の一人。10句の「嚴光」は、後漢の隱者(『後漢書』
 卷八三・逸民列傳)。11句の「灞陵」は、後漢の隱者・梁鴻や韓康が隠れた山
 (同右)。12句の「礪谿」は、出仕前の太公望が釣りをしていたところ(『韓詩
 外傳』卷八)。13句は、東方朔「非有先生論」「故養壽命之士莫肯進也、遂居
 深山之間、積土爲室、編蓬爲戶、彈琴其中、以詠先王之風、亦可以樂而忘死
 矣。」(『文選』卷五二)。14句は、『三國志』(卷十一) 魏書卷十一・裴注「魏略
 曰、……(焦先) 飢不苟食、寒不苟衣、結草以爲裳、科頭徒跣」。15句は、『宋
 書』(卷九三) 隱逸列傳・朱百年列傳「朱百年、會稽山陰人也。……攜妻孔氏
 入會稽南山、以伐樵採箬爲業。每以樵箬置道頭、輒爲行人所取」。16句の「蘭
 陵」は「巴陵」の誤りか。「韓康字伯休、一名恬休、京兆霸陵人。家世著姓。
 常采藥名山、賣於長安市、口不二價、三十餘年。」(11句に同じ)。21句は、『抱
 朴子』外篇・詰鮑「靈禽噉嗜於阿閣、金象焜晃乎清沼、此豈卑辭所致、厚幣
 所誘哉。」を承けるか。22句は、前節所引の鮑照「代東武吟」を承けるだろう。

23句は、『太平廣記』(巻九)王烈「烈入河東抱犢山中、見一石室、室中白石架、架上有素書兩卷。」(出神仙傳)。24句は、『晉書』(巻九四)隱逸列傳・楊軻列傳「常臥土牀、覆以布被、僕寢其中、下無茵褥」。25句は、枚乘「七發」客曰、……蘭英之酒、酌以滌口。」(『文選』卷三四)。26句は、『世說新語』栖棲「阮步兵嘯聞數百步。」劉孝標注「魏氏春秋曰、……嘗遊蘇門山、有隱者莫知姓名、有竹實數斛、杵白而已」。27句は、左思「詠史詩八首」其二「鬱鬱澗底松、離山上苗。以彼徑寸莖、蔭此百尺條。世胄躡高位、英俊沈下僚。」(『晉詩』卷七)。28句は、陶淵明「飲酒詩二十首」其五「採菊東籬下、悠然見南山。」(『晉詩』卷十七)を承けているだろう。29句は、『三國志』(巻十一)魏書卷十一・管寧傳「太祖爲司空、辟寧、度子康絕命不宣。」裴注「傅子曰、……(管寧)遂講詩、書、陳俎豆、飾威儀、明禮讓、非學者無見也」。30句は、『後漢書』(巻八三)逸民列傳・王霸列傳「建武中、徵到尚書、拜稱名、不稱臣。有司問其故。霸曰、天子有所不臣、諸侯有所不友。……以病歸。隱居守志、茅屋蓬戶、連徵不至、以壽終」。32句は、10句の「嚴光」の故事。「後齊國上言、有一男子、披羊裘釣澤中。帝疑其光、乃備安車玄纁、遣使聘之。三反而後至。舍於北軍、給牀褥、太官朝夕進膳。……(光)曰、昔唐堯著德、巢父洗耳。士故有志、何至相迫乎」。

以上、少しく煩瑣になり、また解明できていない典故もあるが、作品全体がほぼ隠士にまつわる故事によって構成されていることが明らかになったであろう。逆に言えば、李徴君の実際の生態にどれほど近づいて描写しているのかが明確ではない。朝廷からの再三の招聘を断わって野にあった学徳の高い人物であることがわかる程度であろう。しかしながら、ここに到って、典故を多用しつつも、意識的に、同時代の特定の人物の姿を描写した詩歌が見られるようになったことは注目してよいであろう。さらに言うならば、詩歌が、著名な人物ではなく、いわばともすれば歴史に名を残さないような一士人を描写し始めたということである。

王績の他者への興味は、そのまま自己への省察に通じている。王績の「晩年敘志示翟處士正師」(巻三七)という自述詩を掲げる。

弱齡慕奇調 弱齡 奇調を慕い
無事不兼修 事として兼て修めざるは無し
望氣登重閣 氣を望んで重閣に登り

占星上小樓	星を占いて小樓に上る
明經思待詔	經を明らかにして待詔を思い
學劍覓封侯	劍を學んで封侯を覓む
棄繻頻北上	繻を棄てて頻りに北上し
懷刺幾西遊	刺を懷いて幾たびか西遊す
中年逢喪亂	中年 喪亂に遭い
非復昔追求	復た昔のごとく追ひ求むるに非ず
失路青門隱	路を失いて青門に隱れ
藏名白社遊	名を藏して白社に遊ぶ
風雲私所愛	風雲は私に愛する処
屠博暗爲儔	屠博は暗に儔と爲る
解紛曾霸越	紛を解きて曾ち越に霸たらんとし
釋難頗存周	難を積きて頗く周を存せんとす
晚歲聊長想	晚歲 聊か長想すれば
生涯太若浮	生涯 太だ浮くが若し
歸來南畝上	更坐北溪頭。古岸多磐石、春泉足細流。東隅誠已謝、西景懼
難收。無謂退耕近、伏念已經秋。庚桑逢處跪、陶潛見人羞。三晨寧舉火、	
五月鎮披裘。自有居常樂、誰知身世憂。	

典故を用いながら、実際の自己の生涯を顧みた作品と考えるとよいであろう。王績を陶淵明を敬慕し、その影響を受けていることは、自述の作品に見られるこのような個別性、具体性からも確認することができよう。さらには陶淵明よりも描写が詳細になっていることも注意されてよからう。

さてここでは、この詩に描かれたことが、王績の伝記的事実とびたりと符合するかはさほど問題ではない。文武を修め、天文・望氣を実践し、有力者を頼って各地を旅し、隋唐の交替に遭って、隱棲した経歴などを、樂府作品という三人称的視点ではなく、特定の個人である自分自身という一人称的視点から詩に綴っており、そのような表現行為が詩において本格的に始められたことを確認しておくべきであろう。

初唐詩になり、詩歌は、本格的に、個人の経歴や人物像を個別・具体的に描写し始めたということができるのでなかろうか。次に注目されるのは盧照鄰の士人を弔う詩に見られる死者の経歴への言及で

あろう。

金曹初受拜 金曹 初めて受拜し
 玉地始含香 玉地 始めて香を含む
 翻同五日尹 翻って五日の尹に同じき
 遽見一星亡 遽に見る 一星亡
 賀客猶扶路、哀人遂上堂。歌筵長寂寂、哭位自蒼蒼。歲時賓徑斷、朝暮雀羅張。書留魏主闕、魂掩漢家牀。徒令永平帝、千載罷撞郎。

〔哭金部章郎中〕(卷四二)

文學秋天遠 文学 秋天のごとく遠く
 郎官星位尊 郎官 星位のごとく尊し
 伊人表時彦 伊の人 時彦を表わし
 飛譽滿司存 譽を飛ばして 司存に満つ
 楚席光文雅 楚席 文雅光り
 瑤山侍討論 瑤山 討論に侍る
 鳳詞凌漢閣 鳳詞 漢閣を凌ぎ
 龜辯罩周園 龜弁 周園に罩る
 已陪東嶽駕、將逝北溟颯。如何萬化盡、空嘆九飛魂。白馬西京驛、青松北海門。夜臺無曉箭、朝寔有虛尊。一代儒風沒、千年隴霧昏。梁山送夫子、湘水弔王孫。僕本多悲淚、沾裳不待猿。聞君絕弦曲、吞恨更無言。

〔同崔錄事哭鄭員外〕(同右)

前者は、尚書省金部郎中となった韋なる人物が、拜命後すぐに亡くなったことを述べ、弔っている。後者は、員外郎のキャリアを持つ鄭なる人物に対する崔録事の作品に同じたもの。典雅な措辞によって鄭の文学的才能を惜しむ。弔詞は、本来的にその人物の生涯を追悼するものであり、そこにはおのずと生前の経歴や活躍が述べられるものである。それが誇張されたものであるかはここでは問題ではなく、弔詞という形式で、一士人の生涯や人物像が記述されていることに注目したい。そしてこのような詩歌は、例えば杜甫の「八哀詩」(卷二二二)などに代表される盛唐の作品において文学的な達成を見る。

楊炯においては、「和劉長史答十九兄」(卷五十)が注目される。その一部を掲げる。

受祿寧辭死 録を受けて寧ぞ死を辞せん

揚名不顧身 名を揚ぐるに身を顧みず
 精誠動天地 精誠 天地を動かし
 忠義感明神 忠義 明神を感ぜしむ
 怪鳥俄垂翼 怪鳥 俄に翼を垂れ
 修蛇竟暴鱗 修蛇 竟に鱗を暴く
 來朝拜休命 朝に來たりて休命を拜し
 述職下梁岷 職を述べて梁岷に下る
 善政馳金馬 善政 金馬を馳せ
 嘉聲繞玉輪 嘉聲 玉輪を繞る

制作背景がよくわからないが、劉長史の事跡を歌っている。勇猛な人となりで、朝廷に対する反乱に対して功績があり、それが認められて「梁岷」の長史となり善政を施していることが、一士人の個別・具体的な人物像、経歴として描かれている。盧照鄰のような弔詞ではなく、生存する者への頌詞という点を注目してよからう。

王勃は、わずかな措辞ではあるが、士人の境遇を描写したことが注目される。

城闕輔三秦 城闕 三秦を輔し
 風煙望五津 風煙 五津を望む
 與君離別意 君と離別の意
 同是宦遊人 同しく是れ宦遊の人

〔杜少府之任蜀州〕前半(卷五六)

綴葉歸煙晚 葉を綴る 帰煙の晩
 乘花落照春 花を乗る 落照の春
 邊城琴酒處 辺城 琴酒の処
 俱是越鄉人 俱に是れ郷を越るる人
 泛泛東流水 泛泛たり東流の水
 飛飛北上塵 飛飛たり北上の塵
 歸驂將別權 帰驂と別權と
 俱是倦遊人 俱に是れ倦遊の人

〔他郷敘興〕(同右)

〔臨江二首〕其一(同右)

引用のそれぞれ四句目に、中央政府で官に就くことはなく、地方官僚としてあ

るいは地方の有力者を頼りに旅遊に苦勞する当時の中下級の士人達の生態が、共に不遇であるという現状への連帯感を伴って表明されていると言えよう。

また杜審言にも友人と不遇感を共有する自述の詩句が見られる。

十年俱薄宦 万里 俱に薄宦
萬里各他方 万里 各おの他方にあり

〔贈崔融二十韻〕冒頭（卷六二）

駱賓王も自己の不遇の境遇を自述する。

薄宦三河道 薄宦 三河の道
自負十餘年 自ら負くこと十余年

嗟爲刀筆吏 刀筆の吏と爲るを嗟じ

恥從繩墨牽 繩墨に牽かるるを恥ず

〔敘寄員半千〕（卷七七）

以上のように、初唐に到って、詩歌は、士人の境遇を自省的に率直に描き始めたと言えよう。また次の駱賓王の「疇昔篇」（卷七七）は、樂府であり、どこまで彼の事跡を反映しているかわからないが、樂府による自伝的な経歴の自述として読むことができるのではなからうか。少なくとも、当時の士人達の生態を伝えてくれるであろう。長篇であるので抜粋して掲げる。

少年重英俠 少年 英俠を重んじ
弱歲賤衣冠 弱歲 衣冠を賤しむ
……
淹留坐帝鄉 淹留 帝郷に坐り
無事積炎涼 無事 炎涼を積む
一朝披短褐 一朝 短褐を披
六載賦長楊 六載 長楊を賦す
賦文慚昔馬 賦文 昔の馬と慚ぜられ
執戟歎前揚 執戟 前の揚と歎かる
揮戈出武帳 戈を揮いて武帳を出で
荷筆入文昌 筆を荷いて文昌に入る
文昌隱隱皇城裏 文昌 隱隱たり皇城の裏

由来突突多才子

潘陸詞鋒駱驛飛

張曹翰苑縱橫起

卿相未曾識

王侯寧見擬

垂釣甘成白首翁

負薪何處逢知己

……

脂車秣馬辭鄉國

縈轡西南使邛夔

……

十年不調爲貧賤

百日屢遷隨倚伏

祇爲須求負郭田

使我再干州縣祿

……

自有林泉堪隱棲

何必山中事丘壑

……

由来 突突として才子多し

潘陸 詞鋒 駱驛として飛び

張曹 翰苑 縱横として起る

卿相 未だ曾て識らず

王侯 寧ぞ擬られん

釣を垂れて甘じて白首の翁と成り

薪を負いて何の処にか知己に逢わん

……

車に脂さし 馬に秣かいて 郷國を辭し

縈轡を縈らせ 西南して 邛夔に使いす

……

十年 調せられず 為に貧賤し

百日 屢遷して 倚伏に随う

祇だ負郭の田を須求むるが為に

我をして再び州縣の祿を干めしむ

……

自ら林泉の隱棲に堪うる有り

何ぞ必ずしも 山中にて丘壑を事とせん

……

換韻段落を無視した少しく乱暴な引き方ではあるが、樂府の主人公の経歴を語る部分を中心に引用した。繰り返しになるが樂府であるために駱賓王の実際の事跡とどれだけ一致するかはわからない。しかし逆に、樂府という虚構の形式を借りて自身の経歴を語ったとも考えられる。唐以前の樂府に見える、措辞がパターン化した描写ではなく、個別性・具体性あるいは現実性を読み手に想起させる語り口になっていることに注意すべきであろう。

さて、先に掲げた王勃の送別詩に見られた士人達に共有される不遇の状況の描写に対して、宋之間は、相手の才能の豊かさや成功の境遇を描写する。

聞道雲中使 聞くならく 雲中の使
乘聽往復還 聽に乗りて往きて復た還ると
……
拜職嘗隨驛 職を拜して嘗に驛に随い

銘功不讓班
功を銘んで班に譲らず

〔送朔方何侍郎〕(卷五二)

鉉府誕英規 鉉府 英規を誕み
公才天下知 公才 天下知る
謂乘羔雁族 謂わるる 羔雁の族なるに乗り
繼入鳳皇池 繼いで鳳皇の池に入ると
赤縣求人隱 赤縣 人隱を求め
青門起路岐 青門 路岐に起つ

〔送合宮蘇明府頎〕(卷五三)

相庭貽慶遠 相庭 慶を貽すこと遠く
才子拜郎初 才子 郎を拜するの初め
起草俟仙閣 草を起こして仙閣に俟ち
焚香臥直廬 香を焚いて直廬に臥す

〔和庫部李員外秋夜寓直之作〕(同右)

中央官僚を務めていた時の作品群であろう。①②のような環境の晴れがましきから、士人の姿を褒め讃える描写が要請されたのもあろう。特に前二首は、任地に赴く相手に贈る送別詩として相手の才能や経歴などを称賛することが求められたのであり、そうした作詩環境から、士人の姿を描写する表現が洗練されて来たのだとも考えられる。なお第二例の蘇頎に贈られた詩題の「合宮」は河南府河南県(東都洛陽は洛陽県と河南県からなっていた)のこと。

宋之問に詩を贈られた蘇頎にも同様の送別詩がある。
聞道降綸書 聞くならく 綸書降り
爲邦建綵旗 邦の為に綵旗を建つと
政憑循吏往 政は循吏に憑りて往き
才以貴卿除 才は貴卿を以て除かる
詞賦良無敵 詞賦 良に敵無く
聲華藹有餘 聲華 藹として余り有り
榮承四岳後 榮は四岳の後を承け

清絶五天初 清は五天の初を絶ゆ

〔餞澤州盧使君赴任〕(卷七四)

蘇頎は中央官僚を歴任した人物であり、宋之問の例と考え合わせるならば、都から地方へ赴く官僚へのはなむけの讃辭の表現として、このような士人描写が発展していったことが見て取れよう。
沈佺期にあつては、その自述詩に特徴が見られる。「被彈」(卷九五)は、武則天が倒され張易之の一派として驩州(ベトナム北部)に流される前、長安四年(七〇四)の夏の獄中での作である。

知人昔不易 人を知ること 昔より易すからず
舉非貴易失 挙は貴きに非ざれば失い易すし
爾何按國章 爾 何ぞ國章を按えて
無罪見呵叱 罪無くして呵叱せらる
平生守直道 平生 直道を守るに
遂爲衆所嫉 遂に衆の嫉む所と爲る
少以文作吏 少くして文を以て吏と作り
手不曾開律 手ずから曾て律を開かず
一旦法相持 一旦 法によりて相持えられ
荒忙意如漆 荒忙として意は漆の如し
幼子雙囹圄 幼子 双んで囹圄にあり
老夫一念室 老夫 一り念室にあり
昆弟兩三人 昆弟 兩三人
相次俱囚桎 相い次いで俱に囚桎せらる

窮囚多垢賦 窮囚 垢賦多く
愁坐饒蟻虱 愁坐 蟻虱饒し
三日唯一飯 三日 唯だ一飯
兩句不再櫛 兩句 再び櫛らず
是時盛夏中 是の時 盛夏の中にして
嘆赫多瘵疾 嘆赫として 瘵疾多し
瞪目眠欲閉 眼瞪れば 眠るに閉じんと欲し

暗鳴氣不出 暗鳴するも 氣出でず
有風自扶搖 風有れば 自ら扶搖し
鼓蕩無倫匹 鼓蕩して倫匹無し

罪を得て、獄につながれたという環境からか、措辞は典故をほとんど用いず、激烈であり、生々しい。「圜圜」「念室」はともに監獄のこと。詩歌がこのような一人個人の悲惨な境遇、劣悪な獄囚としての生活環境を自らありのままに表現することは、初めての例といってよいのではなからうか。幼い子や兄弟まで捕らえられた状況にも言及していることも注目される。なお引用最後の「瞪目」句は、不安と憤りの余り目がさえて眠れない様子を描いているのである。悲惨で劣悪な境遇の表現は漢代の民衆の辛苦をテーマとした「戦城南」「東門行」「平陵東」「婦病行」「孤兒行」などに学ぶことはあったであろうが、この作品は、楽府という三人称的視点の物語ではなく、自らが置かれた現実の姿を描写したものと見て注目されよう。

また沈佺期には「南省推丹地、東曹拜瑣闈（南省 丹地に推され、東曹 瑣闈に拜す）」に始まる「自考功員外授給事中」（卷九七）があり、その詩題から考えても、彼は自らの経歴の描写に熱心であったとも考えられる。沈佺期が他の者の経歴を描いた作品としては、「酬楊給事兼見贈臺」（卷九七）が挙げられる。

子雲推辨博 子雲 弁博を推され
公理擅詞雄 公理 詞雄を擅まます
始自尚書省 始めは尚書省自りし
旋聞給事中 旋って給事中たるを聞く
言從溫室秘 言は温室に秘し
籍向瑣闈通 籍は瑣闈に通ず

「尚書省」「給事中」という唐代においても実際に用いられた具体的な役所・職名が歌われており、経歴の描写と実際との関係が一層直接的なものとなって

いるだろう。
本節最後に、初唐から盛唐への架け橋となる陳子昂の作品を見てみよう。
昔君事胡馬 昔 君は胡馬を事とし

余得奉戎旆 余は戎旆を奉ずるを得
攜手向沙塞 手を携えて沙塞に向かい
關河緬幽燕 関河 幽燕に緬かなり
芳歲幾陽止 芳歲 幾たびか陽かからんや
白日屢徂遷 白日 屢やかに徂遷す
功業雲臺薄 功業 雲台に薄く
平生玉佩捐 平生 玉佩を捐つ

「西還至散關答喬補闈知之」（卷八三）
喬知之と燕趙の地方へ異民族折衝に赴いたこととその後自らの事跡を、交遊を踏まえて描写している。交遊の様子は、漢の古詩の時代から描きつづけられているが、それを官遊を共にしたという経歴の視点から、個別・具体的に描写しているところに新しさを認めることができるのではなからうか。また交遊の親密なる描写は、先に引用した「古詩十九首」其七（「不念攜手好」とあつた）を反転したものであるとも思われる。

「答韓使同在邊」（同右）には、次のようにある。
復聞韓長孺 復た聞く 韓長孺
辛苦事匈奴 辛苦 匈奴を事とす
雨雪顏容改 雨雪 顔容改まり
縱懷才位孤 縱横の才位 孤なり
空懷老臣策 空しく老臣の策を懷き
未獲趙軍租 未だ趙軍の租を獲ず
但蒙魏侯重 但だ魏侯の重きを蒙り
不受謗書誣 謗書の誣りを受けざらん
當取金人祭 當に金人の祭を取り
還歌凱入都 還た歌凱して都に入るべし

詩題は「韓の使いして同に辺に在るに答う」と訓むのであろうか。垂拱二年（六八六）に張掖への行軍に従った時の作であろう。韓を漢の武帝の時の將軍で匈奴との戦いに苦しんだ韓長孺に比し、その従軍中の苦悩の姿を描いている。実際には自らが考える戦略が用いられない韓の嘆きであろう。なお「趙軍租」

は戦国・趙の將軍・李牧がとして辺境にいたとき、軍中の市場の租税を士卒の饗応に用いた故事（『史記』卷一〇二・馮唐列傳）。「魏侯」は魏の文侯。「謗書」は史書。「金人」は、霍去病が匈奴の休屠王を破って手に入れた天を祭る金屬の像（『史記』卷一一〇・匈奴列傳）。王績同様に典故を用いた人物描写ではあるが、従軍における一士人の個人としての苦惱（とそれに対する激励）を描いていることに注意しておきたい。

なお陳子昂には、詩題に「落第」と明示し、科擧落第の経歴を自ら表明する作品があることが注目される。科擧の落第をあらさまにすることが、詩歌の世界で忌避される内容ではなくなっていくことがわかる。逆に言うならば、科擧の受験・合否が、士人の生涯において最も重要な案件のひとつとなっていたことが理解できよう。詩題と原文のみを掲げる。

「落第、西還別劉祭酒高明府」（卷八四）

別館分周國、歸驂入漢京。地連函谷塞、川接廣陽城。望迴樓臺出、途遙煙

霧生。莫言長落羽、貧賤一交情。

「落第、西還別魏四懷」（同右）

轉蓬方不定、落羽自驚弦。山水一爲別、歡娛復幾年。離亭暗風雨、征路人

雲煙。還因北山逕、歸守東陵田。

以上、本節では、初唐における人物描写を、士人の経歴を視点として、他者を描く作品、自述の作品を中心に一瞥してきた。唐以前の詩歌に影響を受けながら、初唐の詩人達は、官途などの事跡にまつわる内容を、より個別・具体的に詩歌に描き込むようになったと言つてよいであろう。

唐以前においては、主に樂府や頌詞の中で歌われていた士人の姿は、それを受容する士人達にとって、典型的性質が強く、共通理解できる範囲が広い、いわば公的な性格の強いものであったと言えよう。初唐になると、そのような詩歌とともに、他者あるいは自己の一個人としての士人の姿を描く作品が多く作られ始める。そのような作品は、受容における共有、共通理解の範囲が限定されているという意味で、公的性格をあまり帯びない詩歌であると言えよう。詩歌の内容が、士人達共有の世界から、個別性・具体性が明確な世界を強く意識し始めるといふ、詩歌史の流れを（ここにも見て取れる）と考える。そして個別・具体の世界を強く探求するがゆえに、却つて詩歌の描く世界は総体として広がりを獲得することになっていったとも言えるのである。

【注】

(1) このような視座を明確に示した論考として、松浦知久『李白研究』第四章「詩人としての自己と他者―周辺詩人との交遊をめぐって―」（三省堂、一九七六年）がある。本論においても啓発を受けることが多かった。

(2) 『聞一多全集・四』（香港三聯書店版、一九八二年）。

(3) 中華書局、一九八〇年。二〇〇三年版による。

(4) 四川人民出版社、一九八一年。

(5) 山西教育出版社、一九九〇年。

(6) 上海古籍出版社、一九九三年。

(7) 「在唐代詩人中、李頎第一位以詩成功地刻画了人物性格。」（袁行霈『中國文學史 第二卷』第四編「隋唐五代文學」第二章「盛唐的詩人群體」、高等教育出版社、一九九九年）。

(8) 以下に、論者が目録した李頎の人物描写詩の特徴を考察する専論を掲げる。王進駒「談李頎的人物詩」（『光明日報』一九八四・一・一〇文學遺產六二〇）／王錫九「試論李頎的人物素描詩」（『鎮江師專學報（社會科學版）』一九八五・一二）／王友勝「李頎詩中人物形象簡論」（『唐代文學研究』九、二〇〇二年）／陳麗娟「李頎人物詩的獨創性及其原因」（『太原師範學院學報（社會科學版）』二〇〇六・一三）／羅琴「論李頎的交往詩及其人物素描」（『重慶師範大學學報（哲學社會科學版）』二〇〇八・四）／李建崑「試論李頎交往詩之人物形象與史料價值」（『興大中文學報』二三、二〇〇八年）／魏景波・魏耕原「李頎歌行體人物詩與盛唐氣象」（『文史哲』二〇一二年）。

このほか、李頎文學を全体的に論ずる論者においても、人物描写における特徴が指摘されているものもあるが、それらは必要に応じて参照する。

(9) 訓読は吉川幸次郎『詩経国風・下』（岩波書店、一九五八年）による。

(10) 訓読と語釈は注(9)『同上』による。

(11) 以下、遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』（中華書局、一九八三年）により、その巻数を示す。

(12) 花房英樹『文選（詩騷編）三』（集英社、一九七四年）に拠る。

(13) 松浦知久『中國詩歌原論』「樂府・新樂府・歌行論―表現機能の異同を

中心に―(大修館書店、一九八六年)。

(14) 注(12)に同じ。

(15) 小川環樹『唐詩概説』(岩波書店、一九五八年、三九頁)に「たとい楽府題を取らなくても、楽府の詞によってかかつて歌われたような情景、情調を指示することがある。「古意」というたぐいの題がそれである。」とある。

(16) 注(15)小川氏『概説』十頁。

(17) 以下、李頎詩を含めて唐詩の引用は、『全唐詩』(中華書局、一九六〇年)により、その巻数のみを示す。

(18) 金栄華『王績詩文集校注』(新文豊出版公司、一九九八年)、康金声等『王績集編年校注』(山西人民出版社、一九九二年)を参考にした。本文の一部を金氏校注に従い改めている。

(19) 陶敏ほか『沈佺期宋之問集校注 下』(中華書局、二〇〇一年)。但し、「送朔方何侍郎」詩は制作時期未詳と扱う。

(20) 『全唐詩』は「請」に作るが、『文苑英華』(卷二六八)によって改める。

(21) 注(19)『同・上』。

(22) 羅庸「陳子昂年譜」(徐鵬『陳子昂集(修訂本)』所収、上海古籍出版社、二〇一三年)。

(中国文学)

A Study of Li Qi's Poems Representing High Tang Literati Part I

Yoshiharu KAWAGUCHI

The purpose of this article is to research Li Qi's literature, especially to understand the features of his poems representing High Tang Literati. This article is divided into 4 parts.

Part I endeavors to trace the history of verse representing Literati (including the poets themselves) from Xian Qin to Early Tang.

Before the Tang dynasty, in general Literati is represented in Yuefu or Odes. The figure of Literati in these verses has a tendency to be a character or an image that everyone holds in common.

When it comes to the Tang dynasty, in Early Tang the verse begins to represent Literati as a specific and concrete character.

这篇文章研讨李颀文学, 特别阐明描写盛唐士人的诗歌特征。这篇文章分为四篇。

第一篇探索描写自先秦到初唐士人的诗歌演变。

唐之前, 一般的是乐府和颂词描写士人。这种诗歌描写士人的特点是有着一般人共享的人物性格和形象。

到了唐代, 初唐诗歌开始描写有个别性和具体性的士人。